一れつ

教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会

去る２月 14 日、「教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会」が開催されました。今回の研修会では、深谷洋庁長より、「おふでさきにみる日々の心構え」と題しお話をいただき、つづいて言語ごとに小グループに分かれ、約１時間に亘りねりあいが行われました。ねりあいでは、深谷庁長の講義内容を振り返ると共に、それぞれが歩んできた教祖 140 年祭への活動について話し合いました。今回の研修会はオンラインでも開催され、対面式には 40 名、オンラインにはニューヨークやシカゴ、また、カナダから 16 名の参加者がありました。

天 理 教 ア メ リ カ 伝 道 庁

No.940

MARCH
2026

TenrikyoAmericaCanada.org

つらつらせんがく
熟々浅学

― 祭儀について（2）―

今月は、春季霊祭を執り行います。先人たちがこの御教えを遺してくださったから、今の私たちがあることを思い出していただきたいと思います。そして、先人たちに負けないように、次世代にこの御教えを伝え、また、世界が陽気ぐらしとなるように努めたいと存じます。

月末には、伝道庁とニューヨークセンターでTwo Day Courseが開催予定です。また、来月と再来月には、管内各地で「ひのきしんデー」が開催されます。一人でも多くの方にご参加いただきたいと思っていますし、各地でのにをいがけの一助にもなればとも願っています。

そして、伝道庁６月月次祭後からアメリカ修養会の開講予定です。大勢の方に志願していただいて開講できるようお声がけをお願いいたします。

さて、前回、天理教の祭儀が、単なる形式ではなく、親神様と教祖に対する「崇敬（すうけい）」の心を態度として表す、最も大切な機会であるということを書きました。

今回は、その崇敬の心を、単なる個人の感情に留めることなく、世界救済の力へと昇華させる鍵、即ち「一手一つ」の重要性に焦点を当て、おつとめと月次祭の起源からその本質を探ってみたいと思います。

祭典において、参拝者を含め、おつとめ奉仕者一同の心が「一手一つ」になって勤めることの意義は計り知れません。

「一手一つ」と言う時、私たちは先ず、おつとめ奉仕者の上段の昇降や、手振りの動作がバラバラにならないという「形の一致」を強調すると思います。形が整っていることは、親神様への礼儀として重要です。しかし、それ以上に求められているのは、おつとめ奉仕者全員の「一手一つ」の心だと思うのです。

たとえ一人ひとりが親神様に対する真摯な崇敬の心を持っていても、全体としてその心が纏とまり、一つの意志とならなければ、その「崇敬の力」は十分に発揮できないのではないでしょうか。祭典に関わる人々が「崇敬」の心を態度に示していると親神様に感じていただくには、全体として調和していることが不可欠だと思うのです。

この「一手一つ」の深遠な意味は、本部神殿で勤められる「かぐらづとめ」に最も明確に表れています。

かぐらづとめの第一節、10人のつとめ人衆の手振りを見てみましょう。その手振りは、決して全員が同じ動きをしているわけではありません。むしろ、それぞれが、親神様が人間を創造された際に用いられたお働きの「理」を手振りに表して勤めています。外から見ると、一見バラバラの動きに見えるかもしれません。

しかし、これらの異なる動きは、異なる理を象徴しながらも、「陽気ぐらし世界の実現」という一つの願い、即ち「一手一つ」の心の下に集約されています。この心の統一があるからこそ、異なる理の働きが合力（ごうりき）となり、親神様がこの世人間を創造された時の壮大な働きを現在に具現化することができると思うのです。

この例から分かるように、「おつとめ」を含めた祭典を勤めることは、形だけの一致ではなく、心と心を一つにして勤めることが、どれほど重要であるかを示しています。

天理教事典（第三版）の「祭儀」の項目にあるように、私たちの中心的祭儀である「つとめ」は、「ただ形だけを勤めるのではなく、全身全霊を打ち込んで、親神の思いに沿った勤修が望まれる」ものであり、この真心こそが「一手一つ」の核となるのです。

親神様と教祖への「崇敬」の心は、月次祭の儀式に限らず、私たちの日常のすべてに浸透していなければなりません。

「祭儀」という言葉を広い視点で見ると、それは大祭や月次祭の厳粛な儀式だけに留まりません。

- 毎日の朝夕のおつとめ
- 神殿掃除や献饌の動作
- 神殿の上段への昇降の所作

これらすべてが、親神様と教祖の御前に臨む「日々の祭儀」の一部として捉えられるべきではないでしょうか。

例えば、神殿掃除で神床や上段に昇る際、「下足（しもあし）」から昇り、降りる際には「上足（かみあし）」から降りるという所作を心掛けること。これは単なる神殿でのマナーではなく、親神様への「崇敬」の心を表す、基本となる作法です。

祭儀の作法を意識せずに、雑な動作で勤めてしまうと、人は「何故こんなことをしなければならないのか」と形式を疑問視しがちです。しかし、全ての所作が親神様、教祖に対する「崇敬」の心を形にしていると理解すれば、自然と襟を正し、真摯な態度でその場に臨めるようになります。そして、日常的にこのような心掛けを持つことで、やがて祭典での儀式的な所作にも自然と活かされることになるのではないでしょうか。

では、この崇敬の心を定期的に表明する「祭典」は、いつ、何故始まったのでしょうか。その起源を探ることで、私たちが何故この祭典を続けるのか、その本質がより明確になります。

教祖ご在世当初、現在の形の大祭は行われていませんでしたが、月々集まる「まつり」は古くからありました。

信仰を始めたばかりの信者たちは、個々の都合に合わせてお屋敷を参拝されておられたと思います。しかし、次第に顔見知りとなり、特別な日である毎月 26 日に、自然と集まる習慣が生まれたと考えられます。

稿本天理教教祖伝逸話篇には、明治 11 年（1878 年）には既にこの集まりが「まつり」と呼ばれていたことが記されています。人々が毎月 26 日にお屋敷に集まっていた主な目的は、教祖にお会いし、直々にお話を伺いたいという純粋で切実な思いだったと想像されます。

文久年間（1861 ～ 1864 年）には、参拝者の増加でお屋敷が手狭になり、庭まで溢れるほどの景況でした。元治元年（1864 年）7 月 26 日の教祖のお言葉をきっかけに「つとめ場所」の普請が進んだという史実からも、この 26 日という日が、教祖を慕う人々にとって特別な日として自発的に形成されていたことが分かります。

この月次祭の原型である「まつり」の根源には、教祖を慕う「自発的な信仰心」と、親神様の御守護への「感謝の祈り」があったのではないでしょうか。

当初の「まつり」で先人たちが何をしておられたのか明確ではありませんが、元治元年以前から「なむてんりわうのみこと」と唱える祈念は行われていました。そして、この集まりに「おつとめ」が組み込まれることで、現在の祭典の形式へと発展したのだろうと思います。

慶応 2 年（1866 年）から教祖は「みかぐらうた」第 1 節の原型を教えられました。そして翌慶応 3 年（1867 年）に十二下りの「みかぐらうた」が教えられ、その後、手振りが順次教示されました。

これらの流れを考えますと、教祖の教えられた「おつとめ」が、かつての「まつり」の場で勤められるようになり、現在の祭典に近い形で執り行われるようになったと推察されます。

この歴史から、月次祭は単なる集会ではなく、教祖から直接授かった「おつとめ」という世界救済の手段を中心に据え、信仰者の自発的な崇敬の心と感謝の祈りが結びついて、形作られたものであることが分かります。

私たちが「祭儀」を勤めないという選択肢は、天理教の信仰者である限りあり得ません。何故なら、祭儀の核心にある「おつとめ」を勤めることは、教祖が人類救済のために教えてくださった最も重要な使命だからです。

この世を親神様がお望みくださる「陽気ぐらし」へと立て替えるために、私たちは神殿に参拝しておつとめを勤めます。祭儀とは、この重大な使命を果たすための、私たち自身の誓いと決意を新たにする場なのです。

この使命を果たすために、日々の「おつとめ」や月々の祭典といった「祭儀」は欠かせません。

朝夕のおつとめや神殿掃除などでの、一見些細に見える作法一つひとつも、「親神様への崇敬を示す日々の祭儀である」と意識して勤めることが大切だと思うのです。

少し大袈裟かもしれませんが、どんなに小さな作法であっても、それが人類救済へと繋がる大きな力となることを信じ、私たちは祭儀に対する真摯な心を持ち続ける必要があるのではないでしょうか。 信仰者として「祭儀」を通じて私たちが果たすべき使命を、常に再確認し、実践していくことこそが、今、私たちに求められていることなのではないかと思えるのですが、皆さんはどのように思われるでしょうか。

深谷　洋

立教189年二月月次祭祭文

これの神床にお鎮まりくださいます親神天理王命の御前に天理教アメリカ伝道庁長深谷洋慎んで申し上げます。

親神様には、人間が陽気ぐらしするのを見て共に楽しみたいと、紋型ないところからこの世人間をお造りくだされて、約束の年限の到来と共に、教祖をやしろに表に現れて、たすけ一条の道をお付けくださいました。爾来、道は世界に伸び広がり、この北米の地にも御教えを広め、お連れ通りくださいます親心の程は、誠に勿体なく有難い極みでございます。私共は教祖のひながたを頼りに、世界たすけに励ませていただいておりますが、先月には、本部にて教祖百四十年祭が滞りなく執り行われ、当伝道庁管内よりも大勢の道の子たちが帰参し、ぢばの理を頂戴させていただくことができ、誠に有難うございました。年祭後、新たなスタートラインに立ち、次の塚に向かって、日々勇んで通らせていただいておりますが、その中にも今日の吉日は、当伝道庁の二月の月次の御祭りを執り行う目出度い日柄に当たりますので、只今より、ぢばの理を頂戴して、おつとめ奉仕者一同心を一つに合わせて、陽気に座りづとめ、てをどりをつとめさせていただきます。

御前には、今日の日を待ちわびたよふぼく、信者一同が参集し、日頃賜る御高恩に御礼申し上げ、尚も変わらぬ御守護にお縋りしたいと、声高らかにお歌を唱和する状をも御覧くださいまして、親神様にもお勇みくださいますようお願い申し上げます。

昨日は、教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会を滞りなく開催できまして、誠に有難うございました。これを機会に、それぞれが持ち場立場を活かして、管内の龍頭となる者たちが、勇んで御用を勤められますようにお導きの程をお願い申し上げます。

私共は、教祖百四十年祭後も気を引き締めて、更に御教えを広め、また、次世代に道を伝えて、世界たすけの御用の上に邁進させていただく所存でございます。何卒、親神様には、私共の真実の心をお受け取りくださいまして、尚も自由自在の御守護を賜り、届かぬところは幾重にもお仕込みくださり、一日でも早く世界の人々が手を取り合ってたすけう陽気ぐらしの世の状に立て替わりますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

二月月次祭神殿講話

神修洋教会長
川上 和海

只今、二月の月次祭を皆様と共に陽気に勤めさせていただきました。有難う御座いました。今月の祭典講話のご命をいただきましたので、あまり人前で話をすることは得意ではありませんが、精一杯務めさせていただきますので、しばらくの間、お付き合いいただきますようお願い致します。

昨年の 10 月頃でしたか、庁長先生から「3 月の祭典講話を務めていただきたい」との依頼を受けました。しかし、その後予定が変更となり、この 2 月の祭典講話を務めることになりました。あまり深く考えずに「承知しました」と答えたのですが、後に人から聞かされて分かったことに、今月は、教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会が昨日開催されたことから、いつもよりも多くの教会・布教所・出張所長夫妻が参拝しておられ、その方々の前でお話しをすることになります。小心者の私にとっては大いに威圧感を感じることになります。また、2 月は教祖 140 年祭後ではありますが、翻訳の都合上、原稿提出締め切り日が 1 月 29 日という事で、原稿は年祭前には殆ど用意を終えていなければなりません。そんな事から、どのような内容にすべきか悩みましたが、年祭の前後という時期を踏まえ、「ひながたから学ぶ、神一条への歩み」というタイトルで、緊張しながらお話ししたいと思います。

この度の年祭前、日本では今季最強の寒波にみまわれ、地方ではかなりの積雪がありました。私の上級教会があります兵庫県北部では、積雪のために小学校や中学校は休校にもなっており、おぢばまで辿り着けるか不安になるほどでした。幸い、年祭当日、幾分寒波は和らぎましたが、まだまだ厳しい寒さの中でありました。そんな状況にも関わらず、この教祖 140 年祭のために、世界中から多くの信者さん方がおぢばに帰ってこられました。今ここに居られる多くの方々も帰参され、夫々の成人の成果を報告し、おやさまにお喜びいただかれたことと思います。

私達は、この天理教の教祖 (きょうそ) を「おやさま」と呼ばせて頂いておりますが、この「おやさま」と呼ばせて頂いているところに大きな意味があります。他宗教の言われる教祖とは、大きな違いがあります。教えを説いた人を教祖（きょうそ）と呼びますが、おやさまは、口は人間でも、心は月日・親神であり、人が教えを説いたのではなく、親神様がおやさまのお口を通して、この世界の真実をお伝え下されたのであります。また、いざなみのみことの魂の因縁あるおやさまは、私達全人類の母親的存在でもあります。そして、私達が理解しやすいようにと、人間の姿をされたおやさまの行動を通して示され、また後世に繋がる私達が成人させていただく上での道しるべとなるために残されたのが、「ひながた」であります。でありますから、おやさまが神のやしろとなられてから現身を隠されるまでの 50

年間の「ひながた」から、私達は時代を問わず学ばせていただけるのであります。

親神様がおやさまの身体に天下られてから、おやさまは多大な御苦労をしてくだされております。

先ずおやさまは、親神様の「貧に落ち切れ」という御言葉に従い、中山家の財産を惜しみなく人々に施し続けられました。その結果、家族や親戚を大切にしておられたおやさまでしたが、その中山家の親族から厳しい非難を受けられることになりました。自分が大切にしている人々に理解されず、「とんでもない嫁だ」と責められ続けたのであります。これは並大抵な苦しみではなかったと思います。当時の日本の文化の中で、中山家に嫁いできたというおやさまの立場を考えますと、そのご苦労は私たちの想像以上だったに違いありません。そのあまりの辛さから、おやさまは何度も井戸端や溜池に立たれました。しかしそのたびごとに親神様に引き止められ、思い直し、親神様の御言葉に添って歩まれたのであります。

教祖伝・逸話篇を読ませていただいていて気付くのですが、神のやしろとなられてから、おやさま自らが、「苦しんだ」と言われているのはこのところぐらいであります。その後もおやさまは幾度となく大変な御苦労を経験されております。けれどもおやさまご自身は、「苦労やないで。」「ふしから芽が出る。」また「ふしから芽が吹く。」というように、逆に勇んで監獄へさえも向かわれております。

このことから、私なりに思うのですが、天保 9 年 10 月 26 日におやさまが神の社となられて以来、おやさまの中には親神様がおられるわけです。そして、親神様がおやさまに対し、「あーしなさい」「こーしなさい」と告げられた。それに従ったおやさまは、家族・親戚の反対を受けながらも、お言葉のままに貧に落ち切られました。しかしながら、おやさまの心には大きな葛藤があったわけです。何度も身投げをしようとまでされたのであります。

神のやしろとなられてからのおやさまは、口は人間でも、心は月日・親神でありますから、ここでのおやさまの葛藤のお姿は、親神様が人間の姿をされたおやさまを通して私達に何かをお示し下されているのだと思うのです。

私達がこのお道を信仰するも、社会の中で生活する中に、人間思案の心と神一条の心との葛藤を経験していると思います。私もある会社に 25 年以上勤務し、そのような葛藤を経験してきました。ここに居られる方々も、そういう経験をされているのではないかなと思います。

「ひながた」の道中で、おやさまが段々と親神様の心に徹し切られるようになっていくことにより、どんな御苦労をされても苦労とはされずに、返って勇んでおられるという姿から、私達も神一条の心に徹すれば徹するほど、親神様・おやさまの手引きを見出し、御守護の姿を見せていただき、どんな中でも勇ませていただけるようになれるのだと教えていただいているのではないかと思うのです。私はこのおやさまの「ひながた」を通して、そのようにも受け取らせていただく事が出来るのではないかなと思うのであります。

そこで、神一条とはどういう姿勢のことでしょうか？　翻訳ブックを見ますと、single-heartedness with God と訳されており、それを更に翻訳すると「神に対するひたむきな心」となります。また、ある会長さんの書籍には「心の中心に親神様をいただき、すべてをそこに委ねて生きる姿勢」とありました。ついでに AI の Gemini に聞いてみますと、主に天理教において用いられる言葉で、「心の中に親神様を唯一の拠り所とし、その教えに従って一筋に歩むこと」と答えてくれました。今の AI の進歩には本当に驚かされます。

これを、私なりに纏めてみますと、「身の周りに見せていただく姿全てが、親神様の御守護であり、手引きである。その真実のもと、日々を勇んで歩む姿勢」という事になるかと思います。

今ここに居られる方々は、何かしらの親神様・おやさまの導きによってここに来ておられます。身上・事情をたすけてもらった人達、理の親の導きで来ている人達、何かのきっかけでお道の教理に触れた人達、勇んでおられる人達、また今はあまり勇めていない人達、といった様々な人がここに来ておられます。そして、先ほど冒頭でも言いましたように、

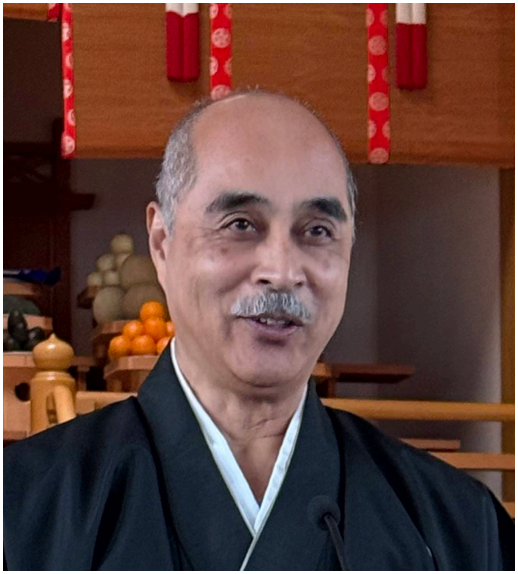
今日は、教会・布教所・出張所長の方々も多いと思います。その方々は、日々を歩む中に、身の周りに見せていただく姿の中から親神様・おやさまの手引きを見出し、御守護の姿を見てこられているのだと思います。そういう感動を重ねておられるからこそ、教会・布教所・出張所長となり、神一条への道を歩まれているのだと思います。

ここで少し、私が親神様・おやさまの手引きを感じさせていただいた話をしたいと思います。

おやさまは、人間の姿をされた親神様、そして又、私達人類の母親的存在であります。私は、本部での祭典に参拝させていただく時は、特別な事が無い限り 26 日の朝づとめに参拝させて頂いております。そして、先ずは教祖殿に座らせて頂くのですが、その時の教祖殿はいつも一杯であります。私が何故か教祖殿に行きたくなるように、皆さんもおやさまを慕って、暖かい何かを求めて教祖殿に行かれるのではないかなと思います。

随分と前の話ですが、上級教会の 90 周年の奉告祭に参拝させていただくため、11 月に帰らせていただきました。その際、何時ものように、26 日の朝勤めに参拝させていただいておりました。その頃、教会として充実した姿を見せていただいていない状況に焦りを感じておりました。そんな心境で、おやさまの前で頭を下げて「どうすれば良いのでしょうか？」と尋ねておりました。

おぢばの 11 月の朝 6 時頃です。カリフォルニアの気候に慣れてしまっている私ですので、重装備で挑んではいましたが、とんでもなく寒くて体は冷え切っておりました。ところが、おやさまにすがるように頭を下げて尋ねておりますと、じわじわと私の掌が熱くなってきたんです。体は寒さでがちがちでしたが、掌だけが熱くなってきたのです。最初は不思議に思っていたのですが、直ぐに、「あっ、これは」と気が付いたのです。私はおやさまから「おさづけ」をいただいております。おやさまから、「そのおさづけを取り次ぐ努力さえすれば、それで良いんだよ。」と言われているように感じたのです。姿をお隠しになった後、広くお渡し下されたおさづけ、そのおさづけを



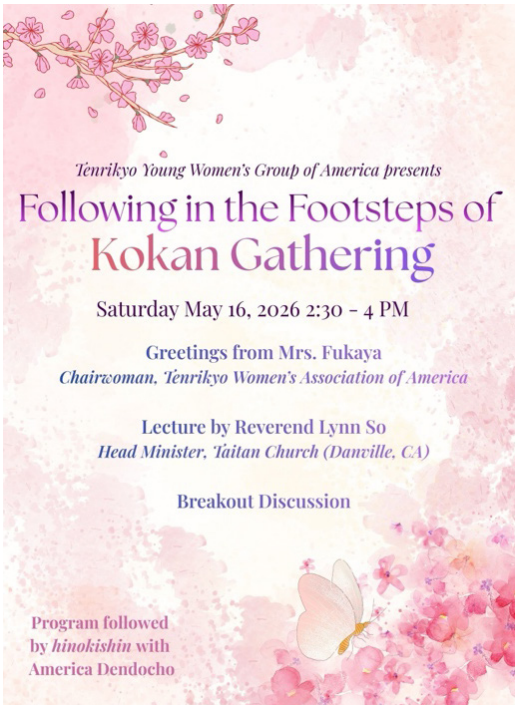
通してお働き下されているおやさまが、「おさづけを取り次ぐ努力をすれば、それで良いんだよ。」と言われた様に感じたのです。私は頭が良いわけでもなく、話し上手でもありません。説いて聞かせる事は下手で苦手であります。しかしながら、おさづけがあります。おやさまがお働き下さるおさづけを頂いております。そのおさづけを取り次ぐ努力をすれば良いんです。後はおやさまがお働き下さるんです。私は、何か嬉しくなりまして、自然と勇んだ気持ちにならせて頂けたのであります。おやさまは存命でおられます。140 年前、当時の方々にとって、おやさまが現身を隠されたことは、今の私達が想像できない程のとんでもなく大きな衝撃だったはずです。これで天理教は衰退していくとさえ思われたことでしょう。しかしながら、それから広くお渡し下さるようになったおさづけと、お急き込みくださっていたおつとめを勤めることによって、日本中で御守護の姿が次々と現れたのであります。おやさまが現身をお隠しになり、おさづけを通してお働き下さるようになってから、衰退するどころか、反対にこのお道は爆発的に広がったのであります。おやさまは存命でお働き下されているのであります。お

ぢばがえりされた時には、教祖殿で静かにおやさまのお言葉を心で聞かれてみるのも良いのではないかなぁと、自分の体験からそう思います。

次に、私どもの教会に繋がります一よふぼくの身上・事情を通して、親神様・おやさまの手引きを見出し、感動させていただいた話をしたいと思います。

その方は、５人兄弟姉妹の中で一番教会に足を運んでくれて、教会と繋がっていた一人なのでありますが、先ず、ある事情で御主人が日本で仕事をしなければならなくなり、三人の息子との生活になってしまいました。そして長男が年頃で難しい時期でありましたことからも、少しぐれてしまい、ある問題を起こしてしまいました。親として、大きな壁にぶつかったのであります。そうこうしている内に、今度は自分が身上に、乳癌になってしまったのであります。

私自身、最初はどうして一番教会に繋がってくれている人が、こんなにも身上・事情が



続かなくてはならないのかと、理解出来なかったのであります。しかし、身上・事情は親神様・おやさまの手引きでありますので、これはどういった親の思惑なのだろう、と真剣に捜し求めました。すると、そこから徐々に色々な事が見えてきたのであります。

先ず、その方自身の家の因縁をたどりますと、父親も同じように、その父親と共に暮らす事が出来なかったのであります。それも二十歳になるまで父親と暮らせなかったんです。そういう因縁があったのであります。自分達はずっと両親の許で育ててもらったのですが、今度は、自分の子供達が父親と共に暮らせない事になってしまったのであります。因縁の自覚をさせられたのであります。そして、その因縁を切らせてもらう努力をする事の大切さを自覚させられたのであります。そしてまた、自分が身上になった時には、その方の父親が真っ先におさづけを取り次いでくれたんです。

実はこの家族の信仰は、その方の母親が始まりでありまして、父親は、「うちのおやさまはお母さんだから。」とよく冗談っぽく言っておられて、信仰に関しては一歩譲っていたようなところがありました。ところが、娘が身上になったと聞いた時には、真っ先におさづけを取次ぎに行かれたのです。「お母さんも来い！」と言って、自らが先に立っておさづけを取次ぎに行かれたのであります。私は後でその話を聞いたのですが、「あのおじさんが、真っ先に、我が娘におさづけを取次ぎに行かれたんだ」と大いに感動して胸が熱くなりました。

娘さんは、父親からおさづけを受けて、親が自分のことを真剣に心配してくれているのを実感させられたに違いないのであります。自分の親に対しての思いを改めさせられたのです。親に対して本当に「ありがとう」という感謝の思いを持つことが出来たのです。そして親としての自分を反省し、親としての成人をされたように思うのです。すると、その長男も徐々に反省して大人になり、当時はいかつい眼つきだった子が、その後は顔付きも本当に柔らかくなり、今では愛想の良い、弟思いで優しい、本当に良い青年になっております。親が親として成人するためには、先ず

自分の親への感謝の気持ちが必要なのであります。その後ご主人も又こちらで働くことが出来るようになり、そして、自分の身上も御守護いただき、その後は家族５人そろっての生活が出来るようになったのであります。

そしてまた、そういう中を通った後、今度は古くからの友人が大変な身上になったのであります。何とか助かってほしいとの思いで、今度は自分がおたすけに行かれるようになったのであります。おさづけの理を拝戴したというだけのよふぼくではなくて、実際におさづけを取り次ぐ、本当のよふぼくになったのであります。

おふでさきに、

にち／＼によふほくにてわていりする
どこがあしきとさらにをもうな　三号 131

とあります。

よふぼくとして使いたい、またさらに喜べる心に成人させたいという思いで手入れをするのであり、それは決して悪いことだと思う必要はない、と教えられております。

この方の道中を振り返りますと、まさにその通りなんです。親神様・おやさまは、本当のよふぼくに育てるために、より喜べるよふぼくに育てるために、身上・事情を通して導いて下されたのであります。

教会を預かる身として、教会に繋がる方に与えていただいた身上・事情の中に、どのような親神様・おやさまの思いが込められているかを真剣に模索したところ、徐々にこのような手引きを見出すことが出来たのであります。そして、大きな感動を与えてもらう事が出来たのであります。このような手引きも、真剣に探し求めなければ、見逃してしまう事にもなります。それこそ、神一条の心で、日々に身の周りに見せていただく姿の中から、親神様・おやさまの手引きを感じ取る姿勢が大切になると思うのです。

私は、長年伝道庁広報委員会の一員として勤めさせていただいておりますが、1999 年から 2013 年までの約 14 年間、伝道庁の月刊誌であります「いちれつ」の中に、「デスクのひとりごと」というタイトルでの記事が、最終ページに掲載されおりました。委員でありました私を含めた３~４人で、その「ひとりごと」を担当させられておりました。それは３~４カ月ごとに訪れる私の大きな悩みでありました。当時、私は会社勤務をしておりましたので、車での片道約１時間の通勤時間が、その「ひとりごと」のネタ探しをする絶好の時間でした。何か良いネタは無いものかと日々を振り返る時間でした。当時の原稿を読み返してみますと、息子の便秘、３人の子供達が参加していた「ちび太鼓」での出来事、自分の親との会話、伝道庁での修養会生の言葉、また育毛剤を買いに来た私に対しての今は無き Savon の薬剤師の言葉など、日々を振り返り、教理と照らし合わせて、その中から手引きを見出しておりました。我ながらなかなか良いことを書いていたのであります。当時の私にとっては、その「ひとりごと」は大きな悩みではありましたが、日々の中から親神様・おやさまの手引きを見出し、感動させてもらえた貴重な時間だったと今改めて感じております。

おふでさきに、

なにもかも神のをもハくなに々ても
みなといたなら心いさむで　　四号２７

とお示しいただきますように、もし、この中に現在少し勇めていない方がおられましたら、今までに親神様・おやさまの御守護、手引きを見出すことが出来た時の感動を思い出していただければと思います。そして、その感動に更なる感動を重ねるためにも、日々の生活の中に、親神様・おやさまの御守護、手引きを探る努力を積み、親心を感じていただきたいと思います。そういう感動を重ねることによって心が勇み、段々と人間思案の心から神一条の心になり切れるように成人していけるのだと思います。共々に勇んで神一条への道を歩ませていただきましょう。

ご清聴ありがとうございました。

伝道庁連絡

2月月次祭
祭　主　　庁長
扈　者　　福井陽一　森下レイモンド
賛　者　　小島ブライアン、丹羽ハミルトン
指図方　　田中知義
神殿講話　川上和海（日）

おはこび
サンフランシスコ教会
神床及上段模様替・神殿増築並屋根葺替願
遷座祭日願、臨時祭典願
おはこび予定：2026年1月26日
遷座祭：2026年3月7日
鎮座祭：2027年8月28日
奉告祭：2027年8月29日

教会布教所事情
サンフランシスコ教会
教会ふしんの為、一時的な住所変更
（～2027/8/28まで）
ジョイアス布教所
布教所ふしんの為、一時的な住所変更（～夏頃まで）

おつとめ奉仕者任命
2026年3月14日(土)付で、高垣弘明イリノイ教会長、長尾照明シータック教会長がおつとめ奉仕者に任命されました。

春季霊祭
3月14日（土）午後7時より、春季霊祭を執り行いました。今回は、大西わきえ・カリフォルニア教会四代会長夫人の霊様を合祀致しました。

Two Day Course
ツーデーコースを3月21～22日の期間で、アメリカ伝道庁とニューヨークセンターにて開催致します。アメリカ伝道庁では8名、ニューヨークセンターでは4名が受講予定です。

修養科スペイン語クラスについて
9月1日から11月27日まで、修養科スペイン語クラスがおぢばにて開講されることになりましたので、お知らせします。日本国査証の必要な志願者は、お早めに伝道庁にお知らせください。

教会長資格検定講習会について
例年9月27日から、5名以上の受講者がいる場合に開講している教会長資格検定講習会英語クラスの日程が変更され、本年より10月27日から開講することになりました。

第86回アメリカ修養会
第86回アメリカ修養会が、2026年6月21日（日）から7月18日（土）まで開講予定です。開講約1ヶ月前（5月17日）までに、英語・日本語クラスは2名以上、スペイン語クラスは5名以上の申し込みがある場合に限り開催予定です。

立教189年4月の別席に関して
御誕生祭前後の4月は、別席者の増加が予想されることから、事前にライブの日時を決めています。天理教ホームページの「別席外国語スケジュール」、または海外部のホームページの「別席外国語スケジュール」から、予定をご確認ください。

各会連絡

ふしん委員会
・天理会館2階のゲストルーム用の新しいタンクレス給湯器が設置されました。
・ひのもの文庫ラーニングセンター内のトイレ上部屋根の雨漏りがありました。業者との保証期間内ですので、連絡をとり補修工事を依頼します。
・ニューロットは以前よりブレーカーが落ちやすくなっており、解決策として電気の配線工事を行います。

布教委員会
・教会長・布教所長・出張所長による伝道庁月次祭当番をおつとめ頂き、有難うございます。以下に5月までの当番をお知らせ致します。加えて、本年後半から来年前半の当番表作成のため、3月末までに希望月（第1希望～第3希望）をフォームに記入し、お知らせください。
https://forms.gle/dumLAec17Wj2Vsb5A4
4月：雪本善、伊藤光春
5月：川上和海、大西太一
・4月17日（金）に回廊ひのきしんを行います。帰参の方々は、朝づとめ45分前（午前5時）に、南礼拝場後方東側にご集合ください。

広報委員会
・各地で活動されている方々の情報を「一れつ・ニュースレター」に掲載し、管内の皆様と共有させていただきます。つきましては、各教会・布教所・地区、また身の周りの方々の活動情報・写真等の提供をお願い致します。

情報提供先：川上 kamishuyo@hotmail.com
林 takhayashi@gmail.com

・伝道庁ホームページは、管内の皆様にご活用頂けるように作成し、また常にアップデートを努めております。是非、伝道庁ホームページをご覧頂き、また周りの方々に紹介頂きますようお願い致します。
http://TenrikyoAmericaCanada.org

・おやさとセミナー同窓会が、本年１月におぢばにて開催されました。詳細はウェブサイトに掲載予定です。

婦人会

・2026 年　天理教婦人会活動方針
一、おつとめの大切さを学び 真実の心で勤めよう
一、日々に教えを実践し おつとめを勤める人を増やそう

・天理教婦人会第 108 回総会
総ての会員がおぢばへ　人を誘っておぢばへ
―別席者とともに―
2026 年 4 月 19 日（日）
式典：午前 9 時 30 分　於：本部中庭
記念行事：・講演会　4 月 18 日（土）午後５時
会場：第二食堂、東講堂、
東右第一棟４階講堂、
東左第五棟４階講堂
・支部の集い　式典終了後

・アメリカ婦人会総会
5 月 16 日（土）午前 10 時
記念行事：Family BBQ

・こかん様に続く会
5 月 16 日（土）午後２時 30 分
於：ひのもと文庫ラーニングセンター
内容：講話（蘇リン台檀教会長）
練り合い

アメリカ婦人会総会、こかん様に続く会の申し込みは右の QR コードから。

・LA 婦人会新年初例会

少年会

・今年の少年会おつとめまなび総会は 6 月 20 日（土）に伝道庁にて開催し、前日の 19 日（金）には少年会練成会を開催します。大勢の参加者をご守護いただけるよう、お声がけをお願いいたします。

・新生児や転入された少年会員がおられましたら、【moto1884@icloud.com】までお知らせ下さい。

青年会

・インターナショナルひのきしん隊が 2026 年 7 月 18 ～ 24 日の期間で開催されます。案内を今月配布させていただきます。是非お声がけをしていただき、興味のある方がおられましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。
seinenkainorthamerica@gmail.com

NY センター

・3/15　春季霊祭
・3/21-22　ツーデーコース
・3/28-29　少年会おとまり会

TENRIKYO MISSION HEADQUARTERS IN AMERICA
2727 EAST FIRST STREET
LOS ANGELES, CA 90033

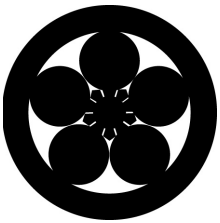
NON-PROFIT ORG.

U.S.POSTAGE
PAID

LOS ANGELES. CA
PERMIT NO.30002

CHANGE SERVICE REQUESTED

THE JOYOUS LIFE



TENRIKYO came into existence on October 26, 1838, when God the Parent, Tenri-O-no-Mikoto, became revealed through Oyasama, Miki Nakayama, to save all humankind. God the Parent is the original and true Parent who not only created humankind but has nurtured and protected human beings ever since.

God the Parent created humankind so that by seeing us live the Joyous Life, God could share in our joy. The living of the Joyous Life is, therefore, the purpose of our existence. Since God the Parent is our Parent, we are all God`s children, and thus we could realize that we are all brothers and sisters.

"With human beings:the body is a thing lent by God, a thing borrowed. The mind alone is yours." Osashizu:June 1, 1889

We are taught that our bodies are borrowed from God the Parent and only our minds belong to us and, by the proper use of our minds, we will be able to live the Joyous Life.